Scotland と交通

Edwin Muir の 200 年

金津和美

１．はじめに

1930 年代の経済恐慌時代の社会相を捉える共同企画として執筆された Edwin Muir(1887-1959)の旅行記 *Scottish Journey* (1935)は、およそ 200 年間の過去を振り返り、スコットランド社会・文化の空洞化の過程と現実を詳らかにする旅行記である。Muir はラナークシャーの炭鉱地帯の退廃的な街の様子を描くことからこの旅行記を始め、その風景の中に、200 年の時を通して "its population, its spirit, its wealth, industry, art, intellect, and innate character" (*Scottish Journey* 3)を失い続けてきたというスコットランドの空洞化の象徴を見出している。しかしその一方で、Muir が問題とする空洞化の 200 年は、スコットランドにおいて著しく交通手段が発達、交通網が拡張し、またそのようなモビリティの変化とともに多様な文学的・文化的イメージが創出され、想像性豊かに繁栄した時代でもあった。だとすれば、スコットランド 200 年における繁栄と空虚というこの矛盾をどのように理解するべきなのか。このような問いを出発点として、本発表ではスコットランドの交通革命の諸段階、すなわちカレドニア運河の開通、鉄道の敷設、自動車道の拡張という三つの過程を辿りながら、スコットランドという土地やその空間性を表す文学的想像力がどのように生まれ、モビリティの変容と関わっていったのかを明らかにすることを試みた。

2. カレドニア運河の開通——経済的発展を支える文学的想像力

18 世紀のスコットランドは深刻な経済不振に苦しみ、特にハイランドの近代化を喫緊の課題としていた。近代スコットランド史において、大規模な羊毛業をハイランドに導入するために小作人の強制退去を求めた Highland Clearances の非人道性はよく指摘されるが、しかし、スコットランド経済の再生は、Highland Clearances によって押し進められた羊毛業にのみ頼っていたわけではない。1770～1780 年代頃には James Anderson や John Knox をはじめとした改良主義者によって、地場産業を育成し、多様化を促進する試みが提案され、1786 年にはこういった提案に応えて、スコットランド沿岸部における漁業促進を目的とした慈善的株式会社、イギリス漁業協会(The British Fisheries Society) が設立された。

水運開発の必要性を強調するスコットランド啓蒙主義による社会進歩の理念を背景として、イギリス漁業協会は国内運輸を円滑化する画期的な事業として、カレドニア運河の建設を推奨する。1801 年にイギリス漁業協会の技術者の一人であった Thomas Telford (1757-1834) は運河建設のための現地調査と設計の依頼を受け、国家事業として認可された運河建設は、1803 年に着工、1822 年 10 月に全行程が開通した。

カレドニア運河建設事業と文学的想像力が密接に結びついていたと考えられる興味深い例として、本発表ではイギリス・ロマン主義時代の桂冠詩人 Robert Southey (1774-1843)の旅行記 *Journal of a Tour in Scotland in 1819* に注目した。建設技師 Telford の案内でスコットランドを旅して回った Southey は、新しく建設された運河、道路、橋を訪れ、その大規模で斬新な公共事業に歓喜し、結果としてもたらされるであろう富と安寧を歓迎している。スコットランド旅行を終えた Southey は、その翌年 1820 年に自身の理想的共同体論を展開した論考 *Sir Thomas More: or, Colloquies on the Progress and Prospects of Society* の執筆に着手する。しかし、Southey の *Colloquies* は 1829 年に出版されると、進歩主義の歴史家 Thomas Macaulay (1800-1859)によってピクチャレスクな感傷主義に過ぎないとして痛烈な批判の対象となった。

３．鉄道の敷設——流動資本となる文学的イメージ

18 世紀末にかけて、スコットランドでは農業、漁業を中心とした経済の活性化が計られたが、しかし、それには限界があり、19 世紀以降のスコットランドは急激に工業化へと向かう。蒸気機関の採用によって急成長した鉄、船舶、石炭、機械産業の多くがグラスゴー周辺地域に集中立地し、大英帝国の繁栄を支える一大重工業センターが形成された。そして、重工業が産業発展の主役を担うようになるにつれ、物流の主力も運河から鉄道へと移り変わっていく。

鉄道敷設からおよそ半世紀の間にスコットランド国内に流通する人や物資は著しく増加した。それとともにスコットランドの文学的イメージ、特に Walter Scott (1771-1832)による文学作品の詩的・小説的イメージが観光資本・文化資本として広く流通し、浸透していったという現象は注目に値する。近代ツーリズムの祖 Thomas

Cook は、1846 年に 350 人の旅行者をレスターからスコットランドへと導き、観光地として Scott の作品の舞台となった場所への関心を高めた。その後、スコットランドへの文学旅行は鉄道会社によって企画・販売されるようになり、1910 年にカレドニア鉄道が発行したガイドブック *To the Homes and Haunts of Scott and Burns by the Caledonian Railway* に見られるように、その流行は 20 世紀初頭まで続く。

しかし、その一方で、"The Great Unknown"として一世を風靡した Scott の作品そのものは次第に読まれなくなり、"The Great Unread"として時代から取り残されていく。特に 20 世紀初頭、新たなスコットランド文学の誕生を模索する文芸運動 Scottish Renaissance が起こると、Scott による文学的伝統は批判の対象となり、積極的に乗り越えが図られるようになった。Muir もそういった Scottish Renaissance の運動に応答した文学者の一人であり、1936 年に出版された詩論 *Scott and Scotland* において Muir は、Scott の豊かな文学的想像力の背後にある "a very curious emptiness" (*Scott and Scotland* 2)に注目し、そこにスコットランド文学が持つ本質的な問題性を指摘した。

4. 自動車道の拡張——スコットランドの原点への回帰

では、Scottish Renaissance に代表されるナショナリズムの高揚を背景として執筆された *Scottish Journey* において、どのようなモビリティの詩学が読み取れるのか。この旅行記において Muir は、エディンバラを出発して南の国境地方を巡り、グラスゴーからハイランドへと北上して、直線的に目的地であるオークニーを目指す。オークニーは Muir の生まれ故郷であり、18 世紀以前の前近代的で原初的な農村風景が残る土地であったことを考えれば、Muir の旅は 200 年の時を遡ってスコットランドの原点へと回帰する旅であったといえるだろう。

この原点回帰の旅の手段として Muir が選んだのが自動車であった。*Scottish Journey* において Muir が車を移動手段としたのは、それが当時の交通の主力であったからだけではなく、自動車道を利用することによる移動性の自由ゆえであったと考えられる。そして、さらに重要と思われるのは、自動車による旅は、Muir にスコットランドを時間的・空間的に俯瞰する視点を与えたという点である。車という交通手段がもたらすモビリティの感覚は "a sort of illusion, partly optical and partly temporal"(*Scottish Journey* 224)と呼ばれ、Muir によれば、それはその日の旅の印象が同じ土地について抱いている過去の印象と同一化し、現在と過去に同時に存在しているような感覚である。車によってもたらされるこのような "This double sensation of time"(*Scottish Journey* 224)を通して、Muir はエディンバラからオークニーまでの旅を空間的に振り返るだけでなく、近代以降およそ 200 年に渡って変容し続けてきたスコットランドの歴史的時間性を辿り、捉え直そうとする。

原点回帰の旅の終わりを前に、Muir は空洞化したスコットランドを再生させる可能性について論じ、Southey の *Colloquies* に言及して、Macaulay による痛烈な批判からの弁護を試みている。Muir にとって Southey が描くピクチャレスクな風景は、国富増大のみを求める進歩の理念から自由となった共同体の姿を象徴する。Muir がオークニーの農業社会の中に見出したのは、そのような共同体の理想像であり、その生活様式について述べることで、旅の最終章にあたる "The Highlands"の章を締めくくっている。

５．まとめ

Muir の旅の手段であった古びた車（1921 年型のスタンダード・モーター社の乗用車）は、その途上、故障を繰り返し、理想の共同体オークニー諸島へと渡る直前には完全に走行不能となる。*Scottish Journey* において原点回帰を試みる Muir の旅は、このように自身が運転する車を解体し続けることで、絶えざる進歩を追い求めて流動する資本主義経済システムの呪縛から逃走し、モビリティの完全な自由と自律性を獲得しようと試みた旅であったと言えるだろう。近代以降、運河建設や鉄道の敷設といったスコットランド交通史を振り返れば、進歩・発展を夢見る経済的想像力と文学的想像力が互いに寄り添い、スコットランド社会の繁栄を生み、支えてきた過程が確認できる。しかし、Edwin Muir は自らの旅の手段である車を解体することで、200 年の間、スコットランドの繁栄を表象してきた意味世界を白紙化しようとする。Muir がスコットランドに空洞を見出したとすれば、むしろそれは新たな言語空間を獲得するため、スコットランドの過去を白紙に戻し、その原点に戻るために必要な作業だったのかもしれない。

引用文献

Muir, Edwin. *Scottish Journey*. Mainstream Publishing, 1979.
---. *Scott and Scotland: The Predicament of the Scottish Writer*. Polygon Books, 1982.